

徳富蘇峰記念館

展示目録 (4)

文学会関係書簡

龍子・等絵画

(昭和57年9月から昭和58年9月まで)

前回は明治二十年代前半に、「国民之友」の附録に活躍した文筆家の書簡を中心に展示したので、今回は文学会関係のものゝ民友社々員のものゝを中心に展示を行う事とする。

文学会については詳しく後述するが、それは日本文壇に、最初に蘇峰が主唱してできた文筆家の集団である。文学会が盛んに開かれた時期と「国民之友」の附録が文学界の注目の的になる作品を発表していた時期とは重なるので、前回の書簡展を一步深めた意味をもつた書簡展としたい。

ここに展示した60通の手簡は、文学会に出席した人々のもゝと、民友社社員のものであるが、それらは巾広い知識層からなる明治最初の文壇の力強いぶぎと、明治の文筆家・ジャーナリストの生活と理想とをひしひしと説む者に感じさせる。

ケース番号16 文学会関係の巻物書簡
文学会関係の書簡を集めた巻物書簡一巻は、書簡整理の過程で、昨年の秋、当館の収蔵庫で見出された。明治21年8月から24年4月までの間の29通の書簡並びに葉書が収められたものである。

21年が17通 22年3通 23年7通 24年2通の以上29通を張り付けられた通り左に記掲する。

(発信者) (あて名) (差出年月)

- 1. 森田思軒 徳富猪一郎 明22・3
- 2. 森田思軒 徳富猪一郎 明22
- 3. 朝比奈知泉 徳富猪一郎 明23・12・6
- 4. 朝比奈知泉 徳富猪一郎 明21・12・13
- 5. 朝比奈知泉 徳富猪一郎 明21・11・6
- 6. 末広重恭(鉄腸) 民友社内文学会幹事 明23・8・8
- 7. 朝比奈知泉 徳富猪一郎 明21・9・4
- 8. 朝比奈知泉 徳富猪一郎 明21・11・17
- 9. 中江篤介(兆民)葉書 徳富猪一郎 明21・8・14
- 10. 山田武太郎(美妙)葉書 徳富猪一郎 明21・9・5
- 11. 依田百川(学海)葉書 徳富猪一郎 明21・9・5
- 12. 坪内雄三(逍遙)葉書 徳富猪一郎 明21・9・6
- 13. 志賀矧川(重昂)葉書 徳富猪一郎 明21・9・7
- 14. 長谷川辰之助(二葉亭四迷)葉書 徳富猪一郎・森田文蔵・朝比奈知泉 明21・9・7
- 15. 坪内雄三(逍遙)往復葉書 徳富猪一郎 明21・9・7
- 16. 朝比奈知泉 往復葉書 徳富猪一郎 明21・10・9
- 17. 依田百川 往復葉書 徳富猪一郎 明21・10・8
- 18. 志賀重昂 往復葉書 徳富猪一郎 明21・10・11
- 19. 坪内雄蔵 葉書 徳富猪一郎 明21・10・12
- 20. 志賀重昂 往復葉書 徳富猪一郎 明21・11・9
- 21. 森田思軒 葉書 徳富猪一郎 明22・12・15
- 22. 幸田露伴 民友社内・文学会幹事 明23・8・7
- 23. 饗庭鞆村 往復葉書 民友社内・文学会幹事 明23・8・7
- 24. 大久保 往復葉書 民友社内・文学会幹事 明23・8・8
- 25. 野口一太郎 往復葉書 民友社・文学会幹事 明23・8・8
- 26. 矢野文雄 往復葉書 民友社内・文学会幹事 明23・8・8
- 27. 依田百川 往復葉書 徳富猪一郎 明21・11・9
- 28. 大西祝 葉書 民友社内・文学会幹事 明24・3・13
- 29. 中村義象 葉書 徳富猪一郎 明24・4・11
- ケース番号17 文学会に出席した人の書簡
- 森鷗外(一八六二—一九二二)
- 尾崎紅葉(一八六七—一九〇三)
- 須藤南翠(一八五七—一九二〇)
- 内田魯庵(一八六八—一九二九)
- 淡島寒月(一八五九—一九二六)
- 幸田露伴(一八六七—一九四七)
- 中西梅花(一八六六—一八九八)
- 石橋忍月(一八六五—一九二六)
- 菅了法(一八五七—一九三六)
- 末松謙澄(一八五五—一九二〇)
- 内田周平(一八五四—一九四四)
- 大槻文彦(一八四七—一九二八)
- 高橋五郎(一八五六—一九三五)
- ケース番号14・15・18
- 民友社々員であつた人々は、出入りが激しい。多くの人々が民友社と関係を持つていたが、中でも蘇峰と深い協力関係にあつた人見一太郎・阿部充家・竹越与三郎・山路愛山・深井英五・宮崎湖処子・国木田独歩・収二・徳富蘆花・久保田米儼など、ほんの一部を示す。
- 民友社々員は後に各々の分野で独立し、名を成した者が多く、かつて民友社々員であつたことを忘れられがちだが、多い。民友社々員の研究は、近代の評論家・文筆家・政治家・ジャーナリスト等、知識層の動向の研究ともなる。それについては当館所蔵の資料は他に比すべきものがないと言える。民友社々員であつた文筆家は「徳富蘇峰関係文書・文筆家来簡(第一巻(山川出版社))」に収録され、近日中に刊行される。この他の民友社々員の書簡は、このシリーズ第三巻に全て収録される予定である。
- ケース番号23
- 徳富健次郎の結婚証明状原稿 22cm x 70cm
- ケース番号17
- 斎藤茂吉(一八八二—一九五三)
- 島木赤人(一八七六—一九二六)
- 平福百穂(一八七七—一九三三)
- 佐々木信綱(一八七三—一九三五)
- 高浜虚子(一八七四—一九五九)

「蘇峰と日本近代文学」

蘇峰が日本の近代文学の歴史に深い係りを持つていたことは、ほとんど忘れられている。

蘇峰が明治二十年二月に創刊した「国民之友」が、明治中期の詩歌・小説評論・外国文学の紹介等の場であったことは、「国民之友」を研究することによって明らかにされよう。

しかし蘇峰が明治二十一年九月八日、森田思軒・朝比奈知泉と共に、明治文壇に最初の文学会を開き、一流の文筆家・評論家を招き、サロンのアカデミーを形成していたことは、あまり知られていない。

文学会についての史料は、記録に残されているものはほとんどなく、山田美妙が「明治文壇叢話」坪内逍遙が「明治二十三年の文士会」の中で随筆風に描いているものと、内田魯庵が「思出す人々」「文学者となる法」の中で断片的に書き残しているのとに止まる。そこで当館所蔵の書簡が重要な意味を持つてくる。

徳富蘇峰記念館所蔵の三万三千通におよぶ蘇峰宛の書簡の中、文筆家からの書簡は、文学会のことをはじめ、当事の文筆家の交遊の様子、作品に対する厳しさ、理想と現実、生活感情等をいきいきと伝えている。これらの書簡から蘇峰と近代文学とが、いかに深い係わりを持つていたかを知ることができると。

当館の書簡から文学会について明らかになったことを、簡単にまとめてみる。

- (一)、文学会は発会する一年前の明治二十年九月の時点で、蘇峰と思軒の間でリテラリークラブとして発案され、矢野文雄・依田学海・志賀重昂・朝比奈知泉・竹越与三郎に相談され、一同大賛成であった。
- (二)、明治二十一年九月八日、最初の文学会が芝公園の三縁亭で開かれた。会費は五十銭、夕方五時三十分から酒なしで会食し、食後後参会者の一人か二人が、一番得意とするテーマで口演し、その後自由に話し合ひ会であった。第一回の出席者は、先の発起人のうち志賀を外く六人と、山田美妙・坪内逍遙・内田周平・高橋五郎・久米幹文。招待されたが病気で欠席の萱了法、大阪「東雲新聞」の主筆で欠席の中江兆民、横浜に人を見送りに行ってまにあわなかった志賀重昂、「チト差岡これあり」と参会しなかった二葉亭四迷と、合計十五名が招かれたメンバーであった。
- (三)、文学会は四回目から「会員は知友五・六名より多からざる同伴を許す」会則を設け、より広く交友親睦を計ろうとした姿勢がみえる。22年5月に上京した蘆花もピジターとして出席している。
- (四)、文学会は第一回が洋食店として評判のハイカラな三縁亭、第二回が玉川座、三回以降は万代軒で開かれた。会場の交渉は朝比奈が行ない、招待状は蘇峰が出している。
- (五)、文学会は毎月第二土曜日に開かれるはずであったが、蘇峰の病氣や忙しさのため、しばしば休会した。書簡から明らかに開かれたとわかる回数、21年4回、22年3回、23年5回、24年2回の計14回である。逍遙が「柿の蒂」の中で、文学会は三回ぐらい開かれただろうと書いているのは思い違いである。思軒は休会を嫌い、会を開くことをすすめる書簡を多く蘇峰に送っている。
- (六)、文学会は「国民之友」の私設アカデミーの観を呈し、「国民之友」が文壇への登龍門となっていた時期と、文学会が盛んであった時期とは一致する。逍遙の短篇小説「細君」美妙の「蝴蝶」露伴の「一口劍」などの作品は、蘇峰が原稿依頼をして生れた作品であることが、書簡から察せられる。彼等の蘇峰への書簡には、寄稿関係と一言で片付けられない意味深いものが多い。
- (七)、文学会から二年後にできた青年文学会に、蘇峰をはじめ、依田学海・森田思軒・饗庭篁村・坪内逍遙など、多くの文学会の会員が演者としてかわるがわる出席している。これは文学会が若い世代の者へ、積極的に貢献していたことを物語る。
- (八)、文学会は24年夏頃までには消えてしまった模様である。その原因は、(1)蘇峰が23年2月に「国民新聞」を発刊してから、帝國議會開設にむけて、より政治的活動に力を入れたこと。(2)文学会が大きくなりすぎたこと。最初は精選された十五名で高い理想を掲げてスタートしたが、23年1月の会では出席者が三十余名と「朝野新聞」(23・1・13)が伝えているとあり、会員は倍になっていく。会の中心人物である蘇峰や思軒・逍遙などの間に、会員人選に対する意見の相違などもあった。 (3)最初は酒なしの会であったが、魯庵や逍遙が伝えていくように、酒好きの露伴や忍月・梅花などが酒を飲んで来るようになり、だんだんとして飲み会になつて行つたらしいことも、解消を早めたのであろう。文学会が約二年半で消えていったことは、文学会の最も文学らしい特色であると考えられる。これについては最後に述べる。
- (九)、文学会のメンバーをここに列挙す。徳富蘇峰・森田思軒・矢野文雄・依田学海・志賀重昂・朝比奈知泉・竹越与三郎・高橋五郎・山田美妙・内田周平・坪内逍遙・久米幹文・二葉亭四迷(一度も出席しなかった逍遙が書いてある)・萱了法・中江兆民・須藤南翠・石橋忍月・尾崎紅葉・内田魯庵・森槐南・宮崎湖処子・淡島寒月・中西梅花・井上通泰・森鷗外・大槻文彦・小中村義象・落合直文・饗庭篁村・末広鉄腸・幸田露伴・福田和五郎・大西祝・大久保・野口一太郎・末松謙澄。現在知られるのは以上36名である。ピジターとして徳富蘆花・中村修一・矢部新作がいる。
- (十)、以上の文学会の会員の顔ぶれは、文

学会の特色を如実に語っている。それは主義主張を同じくする者の集団ではなく、全くといってよいほどそれにこだわらない、話し合ひ楽しさを大切にされた会であったことである。

何故このような会が可能であったのか。それは会を主催していた蘇峰が、支配的・指導的立場をとらず、側でこやかに聞く態度で臨んだからである。民友社の社長兼主筆として、又文芸評論家としても活躍していた蘇峰は、文筆家にとつて魅力のある人物であつたにちがいない。そして蘇峰の興味の本命が、「文学界に覇権を占むるとか云ふが如き了見は少しも持たなかつた」(蘇峰自伝)というように、あくまでも政治であり、文壇に無欲であつたからこそ、後に硯友社派・早稻田派・根岸派の中心人物になつた人々や、個性の強い露伴や鷗外などの一匹狼が喜んで出席するような、自由な文学会が開かれたといつてよからう。この他政治家も、国粹主義者・欧化主義者・漢学者・翻訳家・仏教徒・キリスト教徒も、言文一致の新体詩人、新旧両文学の橋渡しの存在の人も、江戸の流れをくむ戯作者も集まつた。文学会がこのように巾広い知識層を網羅していたことは、明治という若々しい時代には、主義主張を持った者が、文筆家となり得た柔軟性のある文壇の姿を伝えているものである。

文学会が約二年半しか続かなかつたことは、文学会が新たな段階へと成長

し、各々の専門分野に細分化され、研究会や研究機関に発展して行つたことを意味する。言葉換へると、時代の流れの要求が、文学会の解消の自然の姿であつたと考えてよからう。

蘇峰は明治二十一年九月明治文壇の先端に文学会という文筆家集団を作ることによつて、日本近代文学の発展に貴重な役割を果たしたことになるであろう。文学会について最も注目されるところは、新・旧文化の担い手を一堂に会し、明治開化期の持つ独特の魅力を十分に発揮した会であつたことである。文壇の黎明期にこのような会があつたことを忘れてはならない。文学会の明治文学史上にもつ意義は、当館の書簡の研究によつて、より明らかにされるであろう。

書画展

ケース番号 21

川端龍子(一八八五—一九六六)作
紙本 彩色

蘇峰肖像画 117cm X 175cm

昭和26年、蘇峰先生米寿を祝して、門下有志の者が贈つたもの。先生の亡くなつた年昭和32年の正月、蘇峰先生は、「此ノ国宝タルヘキ傑作ノ処置ニ付考慮ノ上、貴蘇峰堂ニ寄進シ、一ハ以テ蘇峰堂鎮守ノ護符トナシ、一ハ以テ蘇堂ニヨリテ永久ニ保存シ」という手簡と共に塩崎彦市に贈られた。

ケース番号 20

奥村政信(一六八六一—一七六四)

江戸中期の浮世絵師。奥村派の始祖で初期浮世絵版画の改良開発に功績をあげた。
「元禄美人風俗画」66cm X 66cm 紙本 彩色

「一人立姿」96cm X 33cm 紙本 彩色

安藤広重(一七九七—一八五八)

江戸後期の浮世絵師。
「水郷提花見図」120cm X 45cm 絹本 彩色

葛飾北斎(一七六〇—一八四九)

江戸後期の浮世絵師。
「四季山水」106cm X 62cm 紙本 彩色

米人フェノロサ氏鑑定 真正
ケース番号 22

呉昌碩(一八四四—一九二七) 浙江省・吉安県の人、中国現代の画家、篆刻家。
「梅」200cm X 40cm
「蓮」200cm X 40cm
「灼」200cm X 40cm

平福百穂(一八七七一—一九三三) 日本画家
「牛」68cm X 117cm 墨画

ケース番号 23

小室翠雲(一八七四—一九四五)

「桃図」54cm X 58cm 紙本 彩色

橋本関雪(一八八三—一九四五)

「南極老人図」39cm X 52cm 紙本 彩色

西園寺公望(一八四九—一九四〇)

軸仕立て書簡 大正七年四月二十六日
130cm X 64cm

蘇峰筆歌稿
軸仕立て 明治世一・二年の頃
127cm X 82cm

か袂に春風ぞ吹く

述懐

緑児の生ひ出るたひに思ふかな我かた
らちねの老哉如何にと

薈薇

色も香も深き薈薇の花見れば折り贈ら
む人ぞ恋しき

夕立

浦風に瀬戸の夕立空宵れて見影涼し富
士の芝山

玉簪箱根の山に降る雨は不二のすそ野
の雲とこそしれ

稲妻の閃く空の彼方よりやがて雷れ行
く野路の村雨

月
打向ふ人の心も消しぬらむ隅田川原の
秋の夜月

目録(3)の訂正

ケース番号 15 矢野龍溪↓尾崎行雄
人名表 依田学海(一八三三—一九〇九)

↓(一八三三—一九〇九)

大槻文彦(一八七四—一九二八)

↓(一八四七—一九二八)

編集後記

明治中期の書簡展に出品した書簡について、一通づつ説明をはじめますと、その一通一通が研究テーマとなるようなものばかりで、原稿がまとまらず困りました。結局名前を列挙するだけという一番簡潔な方法をとりました。皆様方に御来館いただき、真筆を見ていただき、その肉筆から明治に生きた人々と、明治という時代とを立体的に感

明治中期の書簡展(2)

出展書簡筆者の生歿年及び明治20年当時の年齢

氏名	生歿年	出身地	明治20年の時	
依田学海	1833-1909	東京	54才	漢学者、随筆家、小説家
新江兆	1843-1890	東京	44	同志社の創立者、宗教家、教育者
大槻文彦	1847-1901	高知	40	自由民権論者、思想家
西園寺公望	1847-1928	東京	40	国語学者
末広鉄腸	1849-1940	京都	38	政治家
矢野龍溪	1849-1896	愛媛	38	新聞記者、小説家、政治家
久保田米俣	1850-1931	大分	37	政治家、小説家
下田歌周	1852-1906	京都	35	日本画家
内田田歌	1854-1937	岐阜	33	歌人、教育者、実践女学校創立
末松謙澄	1854-1944	静岡	33	儒学者
井上哲次郎	1855-1922	福岡	32	政治家、評論家、翻訳家
高橋五郎	1855-1944	東京	32	小説家、劇評家
須藤南翠	1855-1935	福岡	32	哲学者、東大教授
菅法月	1856-1935	新潟	31	評論家、語学者、翻訳家
淡島寒道	1857-1920	愛媛	30	小説家、新聞記者
坪内逍遙	1857-1936	島根	30	評論家、僧侶
森田思軒	1859-1926	東京	28	小説家、随筆家、俳人
阿部充知	1859-1935	愛知	28	小説家、劇作家、評論家、翻訳家、教育家
朝比奈重	1861-1897	岡山	26	翻訳家、思想家、明治時代のジャーナリスト
嵯峨屋おむろ	1862-1922	島根	25	小説家、戯曲家、評論家、翻訳家、陸軍軍医
徳富蘇峰	1862-1936	熊本	25	新聞記者
大西四迷	1862-1939	熊本	25	新聞記者
山路愛湖	1862-1939	愛知	25	新聞記者
山崎越見	1863-1927	東京	24	地理学者、政治評論家、「日本人」を創刊
石橋三又	1863-1947	東京	24	小説家、詩人
竹越三又	1863-1957	熊本	24	新聞記者、政論家、歴史家、文筆家
井上通泰	1863-1957	岡山	24	哲学者
中尾西崎	1864-1900	愛知	23	小説家
幸野田	1864-1909	東京	23	史論家、評論家
山内富田	1864-1917	東京	23	詩人、小説家、評論家、牧師
内田独歩	1864-1922	東馬	23	評論家
国木田英	1864-1922	熊本	22	評論家、実業家
深井田	1864-1947	福岡	22	文芸評論家、小説家
佐々木信	1865-1924	熊本	22	歴史家、政治家
与謝野翠	1865-1926	福岡	22	歌人、国文学者、医師
小高島	1865-1950	玉路	22	小説家、詩人
平福百穂	1866-1941	姫路	21	小説家、詩人
国木田英	1866-1898	東京	21	小説家
与謝野晶子	1867-1903	東京	20	小説家
長谷川藤	1867-1905	長崎	20	漢詩人
橋本武	1867-1947	東京	20	小説家、随筆家
依田学海	1868-1910	東京	19	小説家、詩人
与謝野晶子	1868-1927	熊本	19	小説家
深井田	1868-1929	東京	19	評論、翻訳、小説家、随筆家
佐々木信	1871-1908	千葉	16	小説家、詩人
与謝野晶子	1871-1944	馬都	16	新聞記者、枢密院顧問官、日銀総裁
小高島	1871-1923	京都	16	新聞記者
平福百穂	1872-1963	京都	15	歌人、国文学者、「心の花」創刊
与謝野晶子	1873-1935	京都	14	歌人、詩人
小高島	1874-1945	馬都	13	日本画家
平福百穂	1874-1959	愛媛	13	俳人、小説家
与謝野晶子	1876-1926	長野	11	歌人
国木田英	1877-1933	秋田	10	歌人、画家
与謝野晶子	1878-1931	山口	9	編集者、独歩の弟
長谷川藤	1878-1942	大阪	9	歌人、詩人
橋本武	1879-1941	東京	8	劇作家、小説家
依田学海	1882-1953	山形	5	歌人、医師
与謝野晶子	1883-1945	兵庫	4	画家
橋本武	1887-1928	京都	1	歌人

じとつていたゞきたいと思ひます。
一人の人に宛てられた書簡が三万三
千通も保管されている記念館は、他に
ないと思ひます。蘇峰宛書簡の整理が

進むにつれ、三万三千通の書簡のもつ
近代史の史料としての価値の大きさに
驚くばかりでございます。

を中心、浮世絵四点、近代の画家百
穂・呉昌碩などの傑作を展示し、心の
洗われるような清々しい雰囲気を感じ
出しています。これらの書簡と絵画に

よつて、墨の香りのする静寂な一時を
お楽しみいただけたら幸甚でございま
す。
昭和57年9月 徳富蘇峰記念館
学芸員 高野静子